

高住宮ノ谷遺跡 たかすみみやのたにいせき

& 高住牛輪谷遺跡 たかすみうしわだにいせき



現地説明会を行いました！& 竪穴建物の調査が進んでいます！



(←) 現地で溝や建物跡を間近にご覧いただきました。
(↓) 県内初の団扇形木製品は、復元品を作って解説しました。



10月10日(土)に現地説明会を開催し、70名の方々に
お越しいただきました。ご参
加いただいた皆さま、ありがとうございました。

現地説明会では、高住牛輪谷遺跡の現地で実際に竪穴建物跡
や一部が暗渠になった溝の跡などをご覧いただいたほか、高住
牛輪谷遺跡と高住宮ノ谷遺跡の調査状況の写真パネルや出土品
の一部を展示し、説明しました。皆さん、興味深そうに遺構や
遺物をご覧になっていらっしゃいました。

高住牛輪谷遺跡で今年度見つかった竪穴建物の
うちの1棟は、1辺約6.8mとやや大型で、壁板
を立てる細い溝や4本の柱跡、床面中央では赤く
堅く焼けた「炉」と考えられる跡が見つかっていま
す。溝を挟んだ北側にも同じような竪穴建物があり、
狭い谷奥に平坦地を造成し、建物を建てていたことが
明らかになりました。

それにしても、なぜこんな奥まった所に建物を
何棟も建てたのでしょうか？



2棟の竪穴建物と溝(南から)

発掘通信

柿の実が朱く色づく様子に、秋の深まりが感じられます。
さて、11月7日(土)に、松原田中遺跡で現地説明会の開催を
予定しています。詳しくは財団ホームページ等でもお伝えします
ので、そちらのチェックもお忘れなく！

鳥取県教育文化財団 調査室

(公財) 鳥取県教育文化財団 調査室

〒680-1133 鳥取市源太 12 番地

TEL: 0857-51-7553 FAX: 0857-51-7550

メールアドレス: tottori-kyobun@kyobun.sakuratan.com

HP: http://kyo-bun.sakura.ne.jp/chosasitsu_new.htm



鳥取西道路の遺跡を掘る!

第78号 2015年10月23日

発掘調査をしていると、「どうして、ここから、こんなものが」と、首をかしげたくなるような、思わぬ珍品が出土することがあります。

今回は下坂本清合遺跡から出土した一片の土器のお話です。



※ 56億7千万年後の子孫のために



土器片の赤外線写真

鎌倉時代(約800年前)の田んぼから、縦横10cmくらいの、古墳時代の須恵器の甕の破片が出土しました(左写真)。古い時代の遺物が新しい時代の層に混じるのは珍しいことではありません。ところがよく見ると、墨でたくさんの漢字が書かれています。古墳時代の日本では、まだあまり漢字が使われていません。一体どうしたことなのでしょうか？

墨書を判読したところ、「法華経」というお経の、「方便品第二」の一節であることがわかりました。漢字の並び方を見ると、行の前後が途切れていることから、もとはもっと大きな土器片であったことが推定されます(左下図)。でも、一体なぜ、古墳時代の土器片にお経が書かれたのでしょうか？

平安時代の後半から、お釈迦様の死後、年月とともに仏教が衰えて世の中が乱れるという「末法思想」が流行しました。人々は弥勒菩薩が次の仏様となって世の中に現れる時代が来るまで経典を残すために、紙巻物、粘土板、銅板、木板、河原石など、さまざまなものに写経しました。これらの写経された経典の大半を占めていたのが法華経です。去年は高住宮ノ谷遺跡で法華経が書かれた「こけら経」が見つかっています。しかしやがて本来の経典の保存という目的は薄れ、極楽往生・現世利益・追善供養などを祈願するようになりました。

河原石に経典を写経したものを礫石経と呼びますが、下坂本清合遺跡の土器片はこの礫石経の一種ではないかと考えています。想像ですが、お経を書くのに手頃な、大きくて平らな石はないかと河原を探していたところ、表面が磨滅して板石そっくりの須恵器の破片を見つけたのではないのでしょうか。

しかしどうしてこんな所から？それはまだ謎のままです。



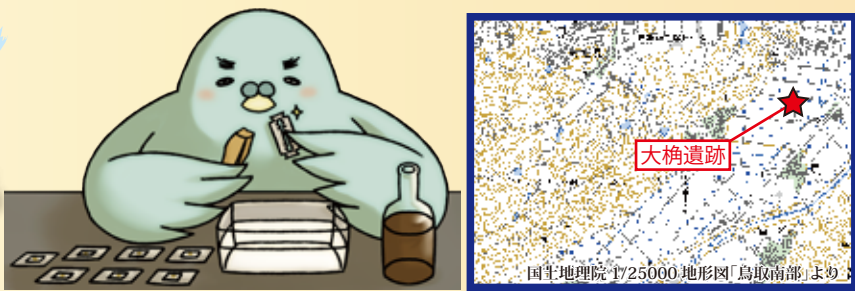
・常増長薄徳少福人衆苦所逼迫入邪見稠若
 有若無等依止此諸見具足六十二深著虛妄法堅受不
 可捨我慢自矜高詭曲心不實於千萬億劫不開佛名字
 亦不聞正法如是人難度是故舍利弗我為設方便說諸
 盡苦道示之以涅槃我雖說涅槃是亦非真滅諸法從本
 來常寂滅相佛子行道已來世得作佛我有方便力開
 示三乘法一切諸世尊皆說一乘道今此諸大衆

法華経方便品第二より

※ 釈迦の死後、弥勒菩薩が次の仏となって人間界に現れるまでの期間。

大楠遺跡

だいかくいせき



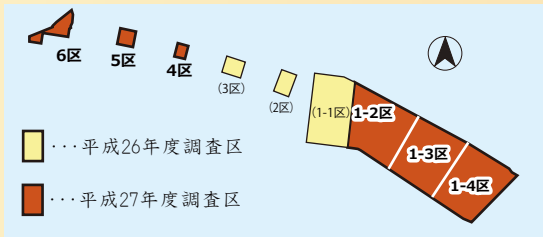
15 流路 全景 (北から)

1-2区では、春から調査を行ってきた、古代の流路(15 流路)が、ようやく掘りあがりました!

断面の写真をみると、砂や粘土が重なりあって堆積している様子がよくわかります。堆積状況を観察するとこの流路がどのようにして形成されたかわかります。ここから、県内最古の「絵馬」をはじめ、人や馬を板材でかたどった「形代(かたしろ)」、牛馬の頭蓋骨など、祭祀にまつわるものがたくさん出土しました。古代のひとびとが、祈り・想いを託した川のあとです。

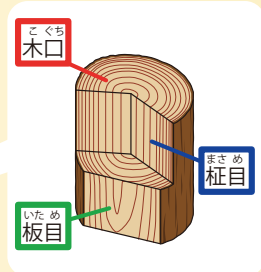


15 流路 断面 (南から)



4区で出土した弥生時代後期～古墳時代前期(約1,950～1,700年前)の木製品の樹種を特定するための作業を行っています。木の組織は種類ごとにつくりが異なります。そのため、写真の①～③のような工程でプレパラートを作成し、組織を顕微鏡で観察して樹種を特定します。

これらの作業を行うことで、どのような種類の木材がよく使用されていたのか、また周辺にどのような木が生えていたのかを知ることができます。



←①出土した木材の3つの断面(木口、柱目、板目)の組織をカミソリで薄く削り取ります。



↑②木材の組織をプレパラートに置き、封入剤と呼ばれる薬品とカバーガラスを使って組織を密封します。

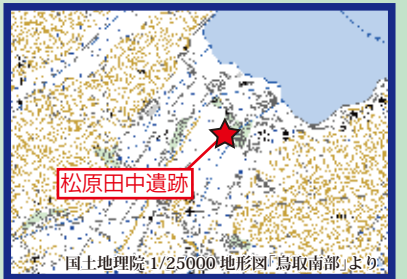
←③1週間ほどで封入剤が固まり、組織が観察できる状態になります。



【参考写真】顕微鏡で観察すると、木材の組織がはっきりと確認できます。写真：高住井手添遺跡で出土したスギの木口の顕微鏡写真(80倍に拡大)

松原田中遺跡

まつばらたなかいせき



古墳時代前期の小型の国産鏡出土!

またまた新たな発見です!今度は3区で小型の銅鏡が出土しました。弥生時代後期～古墳時代後期(約1,900年前～1,400年前)の土器を含む土層を掘り下げていく途中、不意に出土したので、みんなビックリ!!。

鏡は直径約5.2cmの手のひらにすっぽりと収まるサイズです。今後慎重に表面に付着した土や錆びを落としていきますが、今のところ鏡の種類等の詳細は不明です。しかしよく見ると、鏡の裏面に同心円が何重かめぐっているようなので、^{じゅうけんもんきょう}重圏文鏡と呼ばれる古墳時代前期(約1,700年前)の国産の鏡の可能性が^{ここおげ}あります。同じものが古墳時代前期末から中期初頭の因幡の首長墓である古郡家1号墳からも出土しています。古墳に副葬されるほどの貴重なものが、どうしてここから出土したのでしょうか?

今後の調査で、その謎を解く鍵が見つかるかもしれません。



鏡の表面



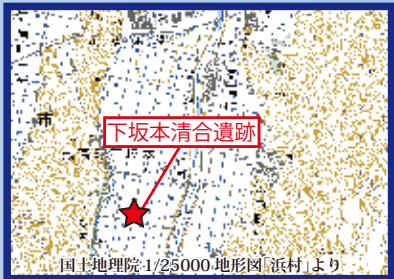
鏡の裏面



下坂本清合遺跡

しもさかもとせいごういせき

井戸枠取り上げ大作戦!!



ピンク色の盛り上がりは発泡ウレタン

9月初旬に開催した現地説明会で、皆さんに見ていただいた井戸には、薄い板を筒状に曲げ、桜の皮でとじ合わせた井戸枠が残っていました(写真左)。このような井戸枠は県内でほとんど出土例がなく、当時の暮らしを知る上で大変貴重な資料なのです。今回は、この井戸枠の取り上げの様子をご紹介します。

井戸枠は、長年土に埋もれ大変もろくなっていたので、壊さず取り上げるため次のように行いました。まず大きなビニール袋を井戸枠の内側に密着させた上に、発泡ウレタン^{じゅう}を充てん、硬化させ、内側につぶれないようにします。続いて外側に付着している土や石をきれいに取り除き、ラップでぐるぐる巻きにします。最後に外側を固定するために、^{ふしやく}不織布でくるんだ上から医療用のギブスを巻きつけ、取り上げ準備が完了しました。



取り上げ大成功